

NEW



holbein

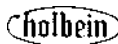
ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
TEL.03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20
TEL.06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp

ホルベインの「デュオ」、それは油絵具でありながら水に溶ける。つまりペトロールやターペンタインなどの溶き油ではなく水で希釈できるのだ。乾燥後は本来の油絵具で描いたような画肌に仕上がる。本格志向の画家たちが、アクリラやテンペラなどと併用して、絵画の技法を大きく広げるのを可能にしたわけだ。また、溶剤に対するアレルギー問題も一掃した。換気に気を使うことなく創作に打ち込める、より安全な油絵具として人気を博してきた。そしてなによりも、今回のリニューアルで、新たに顔料から見直した、全100色。プロユースと呼びたい「デュオ」、それは水を得た油絵具、とでもいえるのではないだろうか。

水で描ける——次世代油絵具
「アクアオイルカラー」「デュオ」



水と油は反発しあう、という誤解。



小川信治

見る者を無限円環にいざなう、
現代の錬金術師

林 洋子=文

Text by Yoko Hayashi

1994

「映画の一場面をモノクロームに油彩で描いて、
『2年間のブランクをリハビリ』していたんです」



教員を辞め、様々なコンクールに出品して賞金を稼ぐ日々だった1994、95年頃。今日まで続く「Without You」シリーズの最初期、映画のワンシーンを描いていた



Without You バス停留所 1997 キャンバスに油彩 35×45cm 戸谷敬重氏蔵

たぶん21世紀を迎えて以降のこと。名古屋周辺の美術館や大学などで企画されたいくつかの展示の、なんとも知的な雰囲気や印象に残っている。複製芸術か、それとも手業か？画面に登場するヨーロッパの古城や塔は、作者が稀代の旅人ゆえか、それとも密室のイメージ・ハンターだからか？——そんな想像も掻き立てられる鉛筆画や油彩画は、一度眼にすると思いがたい。ところが、そこから作家自身の「姿」が見えてこないのだ。無個性と叫びたい。なのに、それが強烈な個性になっている。

今回のインタビューを前に小川信治の経歴を見直すと、彼がそうしたスタイルを確立するのは1994年に着手した「Without You」シリーズ以降のこと。筆者の記憶にある当時は30代半ば、すでに10年以上のキャリアのある作家であった。いったいそれまでの小川の活動はどのようなもの



バッカス 2002 キャンバスに油彩 75.1×63.1cm 個人蔵

2002 「カラヴァッジョの作品をもとに描いたこの作品をはじめ、みんな画集など『印刷物』への愛着から生じているんです」

で、いかにして現在のスタイルに至ったのか……。

「地元の国立大学の教育学部で美術を専攻しました。すでに鉛筆による模写技法は、当時も今のレベルにあったんです」。課題に追われるだけでなく、講義の合間には「ひたすら画集を写していた」と聞いても早熟とわかるが、中学生にして印刷物のフェティシズムを感じ取り、図書館への偏愛を自認する少年だったそうだ。図書館でマックス・エルンストのコラージュ作品に出合い、古い雑誌や写真集、画集にある異国の風景、時代を経たイメージに取り憑かれ、西洋の古絵葉書を集め始めた。

それでも、80年代半ば二十代の小川青年は、名古屋地区の画廊を熱心に回り、ミナマル・アート全盛期からニュー・ペインティングブームへとめまぐるしく変わる「アートシーン」に焦るばかりだった。中学の教師になってからも、自分に義務を課すように律義に年

1回のペースで個展を続けた。流行のスタイルをこなせる器用さを持ち合わせていたものの、自己欺瞞はいずれ行き詰る。「無理にねつ造し続けることに疲れたんです」と。1992年、小川は10年におよんだ教師生活を辞めた。

同時に制作スタイルも完全に放棄しようと、以降2年にわたる意図的に制作から離れ、画材も捨てた。そして95年、筆触や手業の形跡を消し、「自分を無にする」ことを決意すると、ウィズアウト・ユー「あなたなしで」と題したシリーズから自覚的で禁欲的な制作を再開した。無作為に選んだ名作映画のワンシーンから主人公を抜き取り、モノクロームで描く。紙にアクリル絵具で描いていたのが、やがて油彩による多色の世界へと進化していった。また題材も、映画だけでなくダ・ヴィンチやフェルメールなどの西洋名画に向けるようになる。

興味深いのは、小川が単に模写



クラクフ 2008 紙に鉛筆 63×54cm 作家蔵

2008

「2年前の国立国際美術館での
個展をきっかけに開くことに
なったポーランドの個展、その
美術館が面する広場の塔を、
ひとつ増やして描いたのです」



モアレの風景4 / モアレの風景8
(ともに) 2006 紙に鉛筆 56×76cm 作家蔵

しているのではないことだ。つまり主人公を取り除いた空白を、彼は描き埋めるのである。まず写す対象をスキヤナーで取り込み、レタッチソフトで主人公を切り抜き、空いたプランクに同じ作家のほかの作品などから関連するモティーフをいくつもコラージュしていくというのが、小川の制作プロセスである。「パソコン上での設計図づくりが一番楽しい」と語るが、最終的にはパソコンで「編集」を終えたイメージをプリントアウトし、それをキャンバスにト

レースして油彩で描き起こす。あるいは鉛筆画の場合は、トレースした図像をいったん白い紙で覆い、部分的に「窓」をあけて作業していく。つまり、部分的な近視眼的な作業の集積で全体が成り立っているのだ。

「設計図が完璧なら、描画段階での修正は必要ないから」。単に超絶的な手業による模写、古典的な職人仕事というより、テクノロジーに基づく極めて今日的な表現プロセスといえよう。とはいえ、ひとつの鉛筆画に取り掛かると、2か月ほど要するという。実に精緻で気の遠くなるような作業だが、神経が研ぎ澄まされ過ぎると、それを鎮めるために油彩画に取り組む。パソコン作業、鉛筆画、油彩の行き来、循環が、ほどよい制作のリズムを生み出す。

「Without You」着手の2年後、



ヨーロッパの蚤の市などで古葉書や古写真を収集する小川の部屋には、独特のテイストが満ちていた。「モアレ」を連想させるカーテンの模様や大量の画集や映画のビデオソフトなどに囲まれていると、時空間を超えた感覚に襲われる Photo Kenji Morita

おがわ・しんじ

1959年山口生まれ、三重育ち。83年三重大学教育学部美術科卒業。中学校で7年間、養護学校で3年間、美術教師をしながら個展を続ける。94年より作品制作に専念し、97年ときの忘れもの(東京、00、03年)、03年レントゲンヴェルケ(東京)など個展を重ね、06年国立国際美術館(大阪)で個展「干渉する世界」を開催。またグループ展は00年「空き地」展(豊田市美術館、愛知)、07年「縁の迷宮(ラビンス) II」(目黒区美術館、東京)ほかに参加。今年は5月にグループ展「outlet 非作品によるブリコラージュ」展(銀座芸術研究所、東京)、コウイチ・ファイン・アーツ(大阪)で個展、9月26日～11月30日にはポーランドのブンキエル・シュトゥッキ美術館(クラクフ)で個展、11～12月には2人展「創造の舞台裏—ケース・スタディ 篠原猛史・小川信治(仮称)」(東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館)が予定されている。

1997年からは人物や建物など同じモチーフをふたつ並べて描き込むことで、「唯一」という絶対的な価値を転倒させる「Perfect World」シリーズを始めた。長年集めてきた絵葉書コレクションを活用し、既存の写真や古い絵葉書にインクで「落書きする」段階から、白紙にゼロから描き出すスタイルへと展開する(やがて2006年の《モアレの風景》《ミアン大聖堂》で極みに達する)。

また99年には、初めて映像を使った第3のシリーズ「Chain World」に着手。ひとつの風景、絵葉書が層状に組み換えられて別の風景、ストーリーへと循環していく映像作品「干渉世界」へと発展する。06年の国立国際美術館での個展で発表され、スローなアニメーションを見えるような独特の世界観が好評を博した。

アトリエという「密室」での小川の作業はこうした3つのシリーズを並行させながら、現在は4つめのシリーズ「Behind You」に入っている。今秋のクラクフ(ポーランド)での個展で初めて発表する。独特の技法ゆえ、彼の作品数は絵画作家としては極端に少ない。自分の年齢から逆算し、生涯で描きされる作品数を計りながら、画家は「YOU」と「世界」をめぐる「無限円環」のつなぎ目を冷静に見据え、制作が続けている。

●はやし・ようこ「美術研究」
5月13日、名古屋の自宅アトリエにて取材